

ウェンズデーの思い出

椿 康和

■ ウェンズデー加入

私が広島大学経済学部の手伝いに採用されたのは1981年（昭和56年）でした。当時の法学部と経済学部には、40代までの若手教員中心としたソフトボールチームがあり、毎週水曜日の昼休みに、東千田キャンパスの南グラウンドで法学部・経済学部の職員チームと対戦するのが恒例でした。なぜ、水曜日か？ それは教授会とゼミが水曜日にあるため、殆どの教員が集まる日だったからです。その結果、チーム名が「ウェンズデー（水曜日）」となるのは必然のことでした。

ウェンズデーの発足は、法学部・経済学部の前身の政経学部時代に遡ります。伝え聞くところによると、政治史・外交史講座の助教授だった故矢野暢先生が音頭を取り、同じ講座の故五百旗頭眞先生を初めとして、助教授以下の若手教員を誘って立ち上げたようです。矢野先生は1972年に京都大学に転出されているので、発足したのは1970年前後だと思われます。初期からのメンバーには、本会会員の辻秀典先生（社会法）、小村衆統先生（金融論）、松水征夫先生（経済類型論）も名を連ねておられました。法学部と経済学部が政経学部から分かれて誕生したのは1977年ですが、教授会は両学部が交互に水曜日の午後開催としたので、ウェンズデーの活動はそのままの形で継続することになりました。

私自身は小学生の頃の三角ベースや、学部生時代に南グラウンドで学友とボールを追った程度の経験しかありませんでしたが、論文を読むだけの日々の生活に物足らず、先輩の先生方に誘われるままチームに加わりました。天気の良い水曜日は、試合が待ち遠しく朝からわくわくしていました。学部のゼミを持つようになって、それを早めに切り上げ、さっさと着替えてグラウンドに飛び出します。試合が終われば、汗を拭いてあたふたと会議に向かっていました。また、水曜日以外も、都合がつけば仲間とキャッチボールやノックで体を動かしていました（写真1）。



写真1：「南グラウンドでのプレー風景」

新人としてスコアブックの付け方も初めて教えていただきました。スコアブックは重要でした。30試合くらいの年間シーズンが終わると、納会という名の懇親会があり、スコアブックから集計した成績にもとづいて、首位打者、打点王、盗塁王などが表彰され、MVPが選出されました。そして、大学正門横のカキダであつらえたトロフィーを持ち回りで研究室に飾るのです。

■ プレイヤー達

私のポジションは外野手でした。若い頃はまだ足に自信があり、俊足を生かした広い守備範囲で何度もピッチャーの窮地を救ったという自負があります。打撃面では中距離ヒッターで、主軸の先生方がレフト後方の弓道場近くまで飛ばす打球を、うらやましく眺めていました。

当時の名プレイヤーを紹介しましょう。投手陣は剛速球の辻先生とウィンドミルのサウスボー阪本昌成先生（憲法）の強力な二本柱を擁していました。バッテリーを組んでいたのは、元気の良い竹内常善先生（日本経済史）や川崎信文先生（行政学）でした。数ある打者の中では、チームリーダーで、春には弓道場の桜を散らしていた不動の四番菅壽一先生（財政政策）と、鋭い打球で右中間を切り裂いた高哲男先生（経済学史）のお名前を挙げておきます。また、五百旗頭先生が神戸大へ転出される際のチーム送別会では、吉原達也先生（法制史）と一緒に企画した、背番号 500 番のユニフォームを贈ったことも記憶に残っています（政治学会では年次大会開催時に草野球の試合をするのが通例で、そのユニフォーム姿で登板されていたと聞いています）。

対する職員チームです。用務員の大西さんには、水曜日には、学生達に先んじて、12 時前から南グラウンドで試合の場所を確保していただきました。また投手としても数多く対戦しました。本会会員の中では、法学部・経済学部職員チームのメンバーとして、エースの野村建明さんの他、本田幸三さんや田原正治さんらが名を連ねていました。

■ 夏の大会

当時は他の部局でも昼休みにソフトボールを楽しんでおり、図書館や理学部の数学科のチームと時折交流試合を行っていました。そして、毎年夏に全学規模で行われる部局対抗のソフトボール大会に出場し、好成績を上げることがチームとしての大きな目標でした（写真 2）。1984 年の夏には、勝ち進んで行ったものの、主力メンバーが相次いで学会出張等で欠場することになり、決勝戦で涙をのむ結果となったこともありました（確か、学内誌「不死鳥」に小谷朋弘先生（社会学）の手記が掲載されていたはずです）。



写真 2：部局対抗ソフトボール大会
準優勝メンバー（1984 年夏）

■ 交流

楽しみは試合やチームの納会だけではなくありません。教授会が行われる会議室では、時折、夕方から対戦相手の職員チームの皆さんと冷えたビールを酌み交わして、昼のゲームを振り返ることがありました。さらには、延長戦と称して先生方と鷹野橋の飲み屋「峯政」に流れて行くことも。その場は、ソフトボールに限らず、研究者としての悩み、教育や学部運営に関する問題などを先輩方や仲間達と相談できる機会でもありました。また、このような交流を通じて培われた事務職員の方々との関係は、後々、東広島への移転作業や教育環境の整備計画立案など、様々な局面で私を助けてくれることになりました。

現在の大学教職員の置かれている状況からすれば、とても牧歌的な時代でした。しかし、ソフトボールという「遊び」を通じた教職員間の交流が、当時の私たちの教育研究生活にとって潤滑剤として不可欠であったことは事実なのです。

■ 終幕

私の後に採用された若手教員達も、次々とチームに参加して楽しい日々が続いていましたが、1995年の東広島キャンパスへの移転を機に、ウェンズデーは終焉を迎えることになりました。移転



写真3：ウェンズデー最後の公式戦（1994年11月30日）

ウェンズデー東千田キャンパス Fare well 記念
法学部・経済学部 教官対抗ソフトボール大会 平6.11.30 (水)

を翌年に控えた1994年11月、南グラウンドへのお別れの記念として、法学部と経済学部の教員チーム同士で一戦交えました（写真3、前列右端でカープの帽子をかぶっているのが筆者）。そして、移転後の新天地でも、しばらくの間活動を継続しようと模索しました。しかしながら、新校舎からグラウンドが遠くなってしまったこと、広島市内から東広島キャンパスへの長距離通勤の負担、そして何より、押し寄せる大学改革の波という教職員を取り巻く環境の大きな変化が、このような「遊び」を許さなくなっていたのです。